

当県の「重症児の母」と呼ぶに相応しい方の訃報に接して

先日、私が学生時代に出会った、当時重症児を養育していた母親の訃報に接した。

当時はまだ児童福祉法上に重症心身障害児という呼称はなく、また、現在の障害児（母子）通園施設もなく、重度肢体不自由と重度知的障害が重複している重症児は、社会的支援は全くなくて在宅で過ごすしかなかった。

この母親は、当時あった肢体不自由児の親の会に、知的障害児の親の会にも顔を出したが、我が子の障害の重症さからそれら会の活動にどこか違和感・疎外感を感じ、同じような障害の重症さを抱える子どもの母親たちに呼びかてグループを作り、学生の支援を受けながら母子で過ごす一時の場所を確保し活動を開始した。

そのグループが後の当県の重症児の親の会創設（東京に続き、日本で2番目の設立）に繋がって初代会長に就き、当県に国立の重症児施設誘致へと繋がり実現した。また、母子で過ごす集いが後のマザーズホーム創設となり、現在の障害児（母子）通園施設に繋がっている。

更に、出入りしていた我々学生は、そうしたご家族を支援すべく「重症児のためのホームヘルパー」のボランティアの会を立ち上げ、今の県肢体不自由児協会の「ヘルパーの会」に繋がっている。

こうして振り返ると、正にこの母親は当県の「重症児の母」と呼ぶに相応しい方であり、自分も重症児関係の仕事に就いてからもあれこれとご指導いただき、また、可愛がっていただき、今ある自分の恩人の一人であった。

ここ数年はご高齢と体調を崩し入退院を繰り返していたが、時に親の会に顔を出してくださり、いつまでも学生時代の私に思えるのか、暖かい励ましとご指導の言葉をかけていただいた。

告別式の開始時間が、以前から頼まれていた障害児（母子）通園施設系のスタッフの講話の開始時間。

講話をキャンセルしようかと迷ったが、告別式に参列すると、遺影から「子どものことを何事にも優先して考えてくれていた阿部さんはどこに行ってしまったの！」とお叱りを受けるような気がした。

そこで、奇しくも何かの導きかなと思い、お通夜には参列したが告別式当日は、この母親への感謝と創設した障害児（母子）通園施設の現状の報告を兼ねて弔意を込めつつ、予定通り講話してきた。合掌。

阿部幸泰 （2009年1月24日 記）